
魔法戦士リリカルガンダム

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦士リリカルガンダム

【Zコード】

Z2537BA

【作者名】

紅優也

【あらすじ】

様々なガンダムキャラクターがリリカルなのはの世界を改変しようとする転生者を叩きのめすお話です。

プロローグ？（前書き）

始まりの激情スタート・インパルス

プロローグ？

シン SIDE

「う……ん……？」

あれ……此処は……何処だ？」

俺『シン・アスカ』は周りが何故か『エターナル』の私室ではなく何処かの町の路地裏なのに驚いているけど……あれ？

「俺……何で『子供』になつてんだ？」

近くの水溜まりに寄つて顔を見るとそこには紛れもなく九歳になつた俺がいた。

「……はあ……金も無い、情報も無い、身寄りも無いの無い無いくし……？」

何だあれ？

俺は起きた場所の直ぐ近くにキラキラ光る宝石を見つけてそれを手にとつて見る。

「すっげー綺麗だな……よし！」

此れを売つて当座の……「ちょっと待て……」「うわー？」

俺が声に振り向くとそこには銀髪に體と深紅のオッドアイの今のところの同じ年のガキがいた。

「てか、何のようだよ……」

「うるせえ！黙つて俺にその宝石を寄越しやがれ！」

「はあ！？何でお前の命令を聞かなきやいけないんだよ……」

大体この宝石は俺の生命線だ、絶対に渡せるか！

「あんだと……？神に選ばれた最強転生オリ主の俺に逆らつのか？……は？何を言つてんだこいつ頭おかしいんじゃないのか？最強転生オリ主とかマジ笑えんだけど。

「お前頭に蛆虫でも湧いてんのか？

最強転生オリ主とか漫画や本の一次創作の話だけにしつつての。

「つるせ……「あ、あのー」お、来たか。」

俺達が声に振り向くとそこには金髪にルビーみたいに綺麗な深紅の瞳の女子とオレンジ色の毛皮が綺麗な狼がそこにいた。

「あの……その宝石をくれませんか？」

女の子が俺の手に持つている宝石を指差して語り掛けてくる。
うへん……これは俺の生命線だからなあ……

「騙されるんじゃない！

そいつはその宝石を持ち逃げする氣だぞー。」

「んなー？」

俺は俺を指差しながらでつち上げを言つている最強転生オリ主（笑）に驚愕した。

……！？」こいつ……あの子に対する田……確実にあの子を性欲の対象にしか見てねえ！

「騙されるなー！そいつの田をよく見ろーお前を性欲の対象にしか見てねえ！」

俺は女子に慌てて警告する。

「え、えと……『アルフ』……どっちが正しこんだら？？」

アルフ……それがあの狼の名前なのか？

「…………」

アルフが俺と最強転生オリ主（笑）に近づく……げー？

「お、俺！？」

ヤバイ、殺される！

「（さあ、死にやがれモブキャラー！）」

「ふん、あたしが殺すのはあんたじゃないよ。

あたしが殺すのは……こいつだああああああああああー！」

次の瞬間アルフが喋り最強転生オリ主（笑）を爪で真つ二つにした。

「ふん……こいつが『フュイト』をいやらしく田で見ていた事くらいあたしにはお見通しだよ。」

アルフが驚愕している俺を無視するかのように話す。
えと……狼が……喋った？

「あの……それを……くれませんか？」

俺がアルフの事で悩んでいるとフュイト（多分）の子の名前だらう（ひ）

が涙目 + 上田遣いで覗き込んできた。

うぐ……どうしよう……

「…………解ったよ、あんたの探し物ならあんたの物だ。」

俺は結局フュイトに宝石を渡した。

わひと……退散しますか……

「！？危ない！」

「おわー！」

退散しようとした俺の首根っこをフュイトに掴まれ……さつきまで
俺の立っていた場所に凄い量の弾丸やら剣やら槍やら風やら炎やら
色々な物が打ち込まれた。

「死ねええええええええええええええ！」

「うわー!? 何時からこんなにいたんだー?」

そこには神話で語り継がれてそうな美男子が沢山いて殺意剥き出しで俺に襲い掛かってきた。

「下がってな!!」さながら現れたフエイドの疑問も感じず』『ジ

ユエルシード』をくれた恩人を死なす訳にはいかないんでね！」

『ベルギイツノロ、アツツーツツプニ

アルフが今度は犬耳を残して大人の女性に変身し更にフェイトの体に黒のジャケットが装備され手に金色に光る刃を持った鎌が握られる。

「ハーケンセイバー！」

次の瞬間フェイトの前に刃が出現し少年の一人をあっさり倒す。

その隣は別の奴が襲い掛かるけどそこには

ପାତ୍ରାନ୍ତିକ

即座にアルフに殴り倒された。

「ちー、やつぱりフードイトとアルフの『ンビ』は強いか！」

みんな！今はモブキヤラの奴ははほつといてアルフとフェイトの攻撃に集中するんだ！

リーダーっぽい奴がそういうとなんと他の奴等がその通りに従つたのだ。

「月牙天翔！」

「<...!」

「『バーナー』！」

「フヒイ……」「ううんねー。」がふー?」「

奴等が協力を開始した途端にフェイトもアルフも苦戦に立たされる。こいつら……自分の欲望を叶える為に……その欲望の対象すらも傷付けるのかよ！

ふさげるな！——人はお前達の道具じやなし！

お怒りですか？マスター。

二二二

『私の名は『インパルス』。』

何で俺が乗つていた機体が此処に！？

『今せんじやぬことだ。

救いたい。

「何かさフヨイトやアルフとはあつて数分だけじあの一人の目を見て思つたんだ……『自分に何か出来ないかな……』つて。」
「そうですか ならば『魔法の言葉』を教えてあげましょ。」

「！？嘘だろ！？何でモブキヤラが『デバイス』持つてんだよ！？」

『魔法の言葉……その名は『セットアップ』。』

セットアップ

「ああ……ああせへひせー

インパルス、セットアップ！」

そして俺の体が粒子に包まれ右手にビームライフルが出現し左手に盾が出現する。

二二

『 そう、マスターの予測通りこれは『フォースシルエット』です。』
やつぱね。

「行くぜ！」

次の瞬間俺はリーダーっぽい奴に接近しソード・シルエットを展開、更に連結させて大剣にして頭の中に浮かんだキーワードを言つといふところが、凄まじい光と共に奴の体は塵も残さず消え去つた。

「「「「ひ、ひにいにいにいにいにいにいにい！」？！？」」

指揮官が消え去ったのを見ると残りの奴等は恐れをなして逃げ去った。

何た二 たんたあし一 二ら?

「はあ……何とか生き残つたか……」

た
大丈夫?

フェイトが心配そうに俺を覗き込んできた。

「ああ、何とかな。

えつとあんたの名前は何?「

俺は『ある決意』を胸に秘めてフェイトに名前を問う。

「私？私はフェイト……『フェイト・テスター・ツサ』。

それが私の名前

「てめえ、馴れ馴れしい

良いよアルフ、その人はさ

俺はアリイアの言葉に安心しきり提案をする。

卷之二十一

「 ！？！？！？！？」

提案にフヨイトもアルフもびっくりした表情で俺を見る。

アルフが殺氣を俺に向けながら問う。

「違う、フェイト達に何があつたか知らない……だけど同時にあん

な奴等野放しにしたや いけなしんだ

此の書は、著者による個人的見解であり、必ずしも公的立場を表すものではありません。

てしまふ人間がいるかもしない……そんなの嫌だ！

家族を理不尽な争いで無くすのは俺だけで充分だ！」

「アヌカ書」

良によ、一緒に集めよ。」

一緒に集める仲間なのに他人行儀は嫌だせ?」

「七」

一
應
！
」

シン・アスカはまだ知らない。

この少女フェイト・テスター・ロッサが生涯の伴侶になる少女だと言つ事を……

そしてこれが自分と同じようにこの世界に来たもの達と共に神に生み出された異分子《転生者》を削除する戦いの始まりだと言う事を……

プロローグ？（後書き）

如何でしたか？

次回は『〇〇』の三兄妹がなのはに出会います。

次回『三つの誓い』《トリニティ・ハート》

お楽しみに！

プロローグ？（前書き）

三〇〇七『トニー・ティ・ハート』

プロローグ？

唐突だがいきなり時間軸は四年前に遡る。

ミハエルSIDE

「あ…………？」

此処は…………何処だ？」

俺『ミハエル・トリニティ』は茫然としながら周りを見るがほのぼのとした公園の景色が広がつていてるだけでさっきまで戦っていた『ソレスター・ビーリング』のガンダムや戦場だった島すらねえ……

「起きたか、ミハエル。」

「起きたの、ミハ兄。」

声に振り向くとそこには俺の兄妹である『ヨハン・トリニティ』と『ネーナ・トリニティ』の二人がいた。

「ヨハンにネーナか…………で？」

此処は何処だ？」

「此処は『海鳴市』そして今は『西暦2008年』だ。」

「…………は？」

つまりそれって……」

「解った？ミハ兄、私達は『タイムスリップ』したつてわけ。」

おいおい…………『タイムスリップ』とか洒落にならねえぜ…………

「しかもだ、我々は全員同じ年だ。そしてスローネが無い。」

ヨハンの言葉に俺は何でかネーナが同じ視点に入るうえに見慣れたガンダムが無いのに気が付いた。

まじかよ……

「ヨハ兄これからどうする?」

「うむ……私がミハエルが大人だつたら働けるんだが……」

俺もヨハンもネーナも5歳児だから働くのは難しいし……最悪搔つ払いで食い繋ぐしか無いな。

「…………泣き声?」

俺は耳に神経を集中すると微かにだが女のすすり泣きが聞こえてくる。

「…………行つてみよう一晩は宿をとれるかもしれん。」

ヨハンの意見に俺とネーナが反対するはずも無く俺達は泣き声のする方向に向かっていくとそこには茶髪をツインテールにした5歳児の女がブランコの傍で蹲つて泣いていた。

「お、おい、どうした?」

俺は女に近づき泣いている理由を聞く。

「くすん……あのねお父さんがね……大怪我をしちやつてね……入院してるの……だから泣いてるの。」

「…………」

俺もヨハンもネーナも女の言葉に身が硬くなってしまう。

肉親が傷つく……それは何にも増して悲しい事だ。

もしそれが原因でネーナやヨハンが死んだとしたら……他殺だった俺は犯人を地の果てまで追い掛けて復讐をするだろう。

「そりか……ならば私達に出来る事は無いか?」

ヨハンが女に自分達に何か出来無いかと訪ねる。

何も出来ないと思つけどな……

「じゃあ……話し相手になつて。」

女が涙で濡れた目で俺達に言つ。

ま、それ位なら良いか。

「ありがとう、お陰ですつきつしたの。（ヒヒ）」
あれから數十分後女の話し相手になつた俺達は女……いや『高町な
のは』と別れた。

因みになのはの笑顔で俺の顔が熱くなつた事は内緒だ。

「ああ、此方こそ済まなかつたな。」

「あんがとね。」

「おう、じゃあな。」

因みに俺達も名前を教えているからなのはは名前呼びを許可された
んだ。

「ヨハン君、ミハエル君、ネーナちゃん、じゃあね～～。
とてとてと手を振りながらなのはは走つて……あ、転んだ。
なのはは照れ笑いをしながら去つていつた。

「……入るのは解つていい。

出て来い、出て来なれば……撃つ。」

ヨハンが近くの茂みに拳銃を向け警告しながら問つ。

「ち、見つかつたか。」「」

「見つかつちゃつたわ。」「」

そこには神話（『ヒクシア』のパイロットだつたら否定しあうだが
な）に語り継がれてそうな美男子や美少女が七人いた。
こつちの一倍かよ……

「貴様達は何者だ？」

ヨハンが油断無く拳銃を構えながら問い掛ける。

「つるせえよモブキヤラ共、俺のなのはに話し掛けんじゃねえ。
その答えにヨハンもネーナも苛ついたのかヨハンが拳銃の引き金に
掛けている指に力を込める。

「質問に答える、貴様達は何者だ。」

「……僕達は転生者だよ、君達の様なモブキヤラが話し掛けの事も
出来ない崇高な存在なんだよ。」

「は？ 転生者？

馬鹿も休み休み言えよ。

「…………」

あ～～～一人も呆れてんな。

「あんた達に話し掛けたのは……死ね！」

「！」

俺達は女の一人から放たれた光弾を回避し散開する。
くそ！ いきなり戦闘かよ！

「ふん、てめえらを片付けりゃなのはにフラグ建設を出来ないんで
な！」

死んでもらうぜ！」

ち！ 理不尽過ぎるぜ！

俺は懐から拳銃を取り出すとそのまま無造作に刀を構えて接近して
きた男の一人を撃つ……が……

「何い！？」

頭を撃ち抜かれた筈の男の傷が回復し俺に向かってきやがった。

「ふん、俺の『十二の試練』は十二回死ななきや死なねえぜ！」

だつたら後十回殺すまでだ！

俺は馬上拳銃を乱射するが全弾躊躇ひで弾けたが、矢張り

つた

「げふう……」

一ぐわああああああああああああああ！？」

悲鳴に振り向くと俺の隣にミハンとエーナが吹き飛ばされてきた

「畜生……『ドライ』があれば簡単に勝てんの……」
「畜生……此處までも？」

「さあ死に……」

ノ
ネ
ナ
!

そういういながら跳ねてきたのは

「な、『HARO』!?

ネーナの持ち物だった人工プログラム球体『HARO』だった。

『ネーナ、ヨハン、ミハエル、ガンダムの名を呼びやがれ！』

スロー・ネの名を呼べば良いのか？

「…………ミハエル、ネーナ…………賭けるぞ！」

生きるも死ぬも俺達次第だ！

「来い……『ガンダムスローネアイン』！」

一
来やがれ！『ガンダムスローネツヴァイ』！

おいで！ ガンダム！ ネトワーク！

俺達が言葉を言つと手に宝石が出現し宝石が光ると……俺達はそれぞの機体の武装を装備していた。

「ガンダムスローネアイン、目標を廻ぎ払う！」

カンダムアローネ、アリス、イ
目標を喰み切るぜ！」

俺達は転生者達に突撃を開始した。

「これで……仕舞いだあ！」

ヰヤアああああああああああああああああああああ！？

俺は十一の命を持っていた奴を『GNバスター・ソード』で切り捨て
その戦闘は終結した。

周囲には転生者共の死体しか無く俺達には傷一つついていなかつた。

「 おれおれ
で？

ヨハン、これからどうする？

「……転生者達を紛争帮助対象に指定し殲滅しようと思う。」

ヨハンの告げた言葉に俺とネーナは即座に頷いた。

あんな如等を里方しにしていたら何が起るか解らぬからな。

「何せネーナがいるからな『ヴェーダ』にリンクすれば簡単に見つ

かるぜ。

- 11 -

『俺も頑張るぜ、俺も頑張るぜ。』

「ふ……高町なのはには何れまた合つだらう。

その時までにちゃんとした戸籍を用意せねばな。」

俺達は空に飛びながらふつと笑った。

あんなに俺達に純粹に接してきた奴はなのはが初めてだからな。

さてと……転生者共よ待つてやがれ……てめえらは俺達が一人残らず殲滅してやるぜ！

ミハエル・トリニティはまだ知らない。

高町なのはが己の生涯の伴侶になる少女だと言つ事を……

そしてトリニティ達は知らない。

これが彼等と共にこの世界に来たもの達と共に神に生み出された歴史を改変しようとする転生者達を駆逐する戦いの始まりになるという事を……

プロローグ？（後書き）

如何でしたか？

次回は無印の最初にトリー＝ティ＝三兄妹が介入します。

次回『白の始まり、切り裂く深紅

ホワイトマジシャン・レッドスラッシュ

お楽しみ！

第一話（前書き）

白の始まり、切り裂く深紅

ホワイトマジシャン・レッドストラッシャー

第一話

あれから四年後……

ミハエルS.I.D.E

「やれやれ……漸く来たぜなのはのこる学校にな。」

「ミハ兄、私達の目的は此処にいる転生者達を殲滅することなんだからあんまり余計な事を言つて転生者達にばれないようこね?」

「は、誰がんねまをするかよ。」

「ほお……では前のミッションでそのへまをやらかしたのは何処のどいつだ?」

「兄さんの言づ通りだよ。」

君が僕達を窮地に陥れたんだからね?」

「つるせえよ『フロスト兄弟』……」

「ミハエル、言い合ひはお前の負けだ。」

フロスト兄弟もそつ言づなそのへまのお陰で予定より早く転生者を炙り出せたんだからな。」

俺達は今学校への道を歩きながら言い合ひをしていた。

なのはに初めてあつてから四年間俺達は転生者達と戦い続けたがその中で俺達と同じで『ガンダム』の名を持つモビルスーツがいる世界からこの世界に飛ばされた奴等も多数いるらしい。

『シャギア・フロスト』と『オルバ・フロスト』の通称『フロスト兄弟』もそつだこの世界に飛ばされていきなり転生者達と戦闘になつたが自分のガンダムが『デバイス』(転生者共が言つていた言葉だ。)になつている事を知らなかつたから一人共転生者達に叩きのめされていた所を俺達が助けてやつたのでなし崩し的に俺達と共闘している。

因みに良い転生者達もいてそいつらのお陰でなのはのこる学校に最

低系転生者が入る事が解ったから俺達は学校に入学（最も転校生つて設定だけどな）する事にしたんだ。

さてと……最低系転生者共よ覚悟しやがれ……てめえらの腐った野望（原作ブレイクやハーレム）は俺達『チームトローニティ』が打ち砕いてやるぜ！

なのはSHDE

「はあ……」

久々に『あの三人』に合つた夢を見ちゃつたな……

「姉さん、溜め息なんて吐いていたの?
うみこ無くな?

『話し掛けってきたのは私の双子の妹の『高町ゆい』。
因みに一分違いで産まれてきたりしくてお父さん曰く『死ぬ程びつ
くらした。』らしいの。

「あ、うん。ちゅうと5歳の頃を思い出しちゃって。」

「5歳の頃? はい、もしかして初恋の『ミハエル』君かな?

「ふえ!? 何で解つたの!?」

遊んだ事だけしか話してないのに！

「いや……姉さんにかまをかけてみただけなんだけど…… 図星？」

「…………お話をしようか？」

私は殺氣を出しながらゆこに接近するとゆこは凄い速さで下座を

したの。

そんなこんなやつているうちに先生が来たの。

『えへへ～皆様にいきなりですけど転校生を紹介します。』
至るところで『え？』やら『男子ですか？女子ですか？』やらの声
が聞こえるの。

「なのは、いきなり過ぎない？（ぼそぼそ）」

「うん、私もそう思う。（ぼそぼそ）」

私は小声で話し掛けてきた親友の『月村すずか』ちゃんに小声で答
えるの。

『それでは皆さん入つてきて下さい。』

入ってきた五人の転校生の内三人を見て私は絶句したの。

「『ヨハン・トリニティ』だ。
これから宜しく頼む。」

「『ミハエル・トリニティ』だ。

みんなこれから宜しくな。」

「『ネーナ・トリニティ』よ。
みんな宜しくね」

「『シャギア・フロスト』だ。
今日から宜しく頼む。」

「『オルバ・フロスト』です。
兄共々宜しくお願ひします。」
三人とも……久々だね。

オリ主（笑）SIDE

.....

「ヨハン君、ミハエル君、ナーナちゃん、四年ぶりだね！」

卷之三

「確かに久々だな。」

「なのはも綺麗になつたじやない。

これでヨハ兄やミハ兄のお嫁さんになれるね。（笑）

「ふえ！？」

「冗談よ冗談。」

俺『神崎終夜』は突然現れた『ガンダム00』のキャラクターである『トリニティ三兄妹』に似た（と言うかトリニティ三兄妹そのもの）三人の転校生が俺の嫁であるなのはと親しく話しているのを見¹て苛立つっていた。

俺はチート転生者で最強のオリ主なのに……本来はいらない筈のなのはの妹『高町ゆい』のお陰でなのはには知り合い以上友人以下程度にしか接してねえし……アリサやすずかは既に墮とせたけど妹のお陰でなのはとは殆ど話せねえし……

「まあ、良い。

「今夜は『淫獸』がなのはにデバイスを渡す日だ。
そん時になのはにフラグを建設すれば良い。」
「くつくつくつ……俺のハーレムは揺るがないぜー

しかし神崎終夜は知らない。

彼を含む全最低系転生者がトリー元妹はおろかガントムギヤラクターの誰にも勝てない事を……

私達は今へんてこな化け物に追い掛け回されていた。
え？ 何故こうなつたかって？

原因是姉さんが塾から帰る途中でフェレットを見付けて動物病院に連れていつたなんだけれど……夜になつて姉さんが『フェレットさんが心配だから出かける。』と言つて家を出ていつて動物病院に行つたら……半壊した動物病院とその瓦礫の上で咆哮をあげる化け物がいた。

で、今この状況つて訳。

「はあ……はあ……」めんね、ゆい。

良いよ姫さん、兄さん達は言わなかつた私にも罪はあるじ

馬を引ませながら語る奴さん（奴さんは少し運動音痴な人だ）に和
は笑いながら許す。

……！不味いどんどん迫つてくる！

死ぬのかな……私……

次の瞬間私となのは姉さんの間に大剣を背負つた紅い影が舞い降りると化け物の右腕を肩から切り落とした。

その影は……

「み、ミハエル君……？」

今日転校してきた三人兄妹の次兄『ミハエル・トリニティ』だった。

「よーなのはにゅい。

困つてそだだから助けに来たぜ！」

「ミハ兄、速すぎ！」

「私も来ているぞ。」

振り向くとそこにはネーナちゃんとヨハン君も来ていた。

「さ、三人ともその格好……何？」

なのは姉さんの疑問は最もだ。

何せ三人は形や色、武装こそ違つけどメカニカルな鎧を着けていたからだ。

「色々合つてな。

説明はまた後だ！」

ミハエル君が化け物に向き直りそのまま無造作に大剣を横廻ぎに扱い化け物の両足を一瞬で刈り取る。

「隙あり！」

そこに右肩にランチャーを背負つた漆黒の鎧を着けたヨハン君が背中のポッドから大量のミサイルを放つ。

「それそれそれ！」

更に背中に飛行機の様なパーツを着けた紫の鎧を着けたネーナちゃんがビームのマシンガンを乱射する。

「凄い……」

「うん……」

三人とも自分の距離を解つておりそれを外さない様に戦つている。

「止め……と行きたい所なんだが俺達三人とも『封印魔法』は使え
ないんだよなあ……」

ないんだよなあ……」「

ん？『封印』？

「何か出来ないかな」

ミハエル君の言葉に疑問を持つ私の耳になのは姉さんの言葉が届く。

「私はお父さんが怪我をしちゃった時泣いてばかりだった……だけ

だから私は三人の助けたい……一緒に戦いたい！」

「なら……これを使つんだ！」

私達がいきなり聞こえてきた声に周りを見渡すと何となのは姉さんが抱えていたフェレットが喋っていた。

私達はそりやあもう驚いたよ？

いきなり化け物に襲われたり転校生が武器を持っていたのと同じくらい驚いた。

「今は激しくどうでもいいから速く契約をするんだ！」

フューレット（？）が私達にネックレスとペンダントを差

「姉さんはネットレスをお願い！」

「ルーラー」

私はペンダントを手に取つたら……何故か荒野にいた。

「ふにゃー？」

突如の事態に私は慌ててしまつ。

「ほつ……此処に『素質』のある人間が来るとは珍しいな。」
声に振り向くとそこには一人の髪の青年がいた。

「貴方は……？」

「私が？私は此処の管理人さ。
銘は『雪風』と言う。」

雪風が肩をすくめながら言つた。

「さて……問おう、お前は私を使って何を為す？」
私の為したい事……

「なのは姉さんを守りたい。
それが今の私の願い！」「！？ほつ……ならば高町ゆいよ汝を主人
として認めよう。

神の傲慢により生み出された汚らわしき『転生者』を『介入者』と
消し去る役目と共にな。」

そして私は元の景色に戻つた。

「行こつ……雪風！セットアップ！」
「行くよ！」

レイジングハート！セットアップ！」

私となのは姉さんは同時に掛け声をあげ私の体は雪の様に白い鎧と
血の様に紅い深紅の刀が装着されなのは姉さんの体には杖と白い制
服が装着された。

「姉さん……行こつ！」

「うん！」

私達は化け物と戦っているミハエル君達の援護に駆け出した。

ミハエル SIDE

「漸く契約しやがつたか

俺は『ジユエルシーード』の暴走体の攻撃をGバスターソードで受け流しつつぼやく。

ま、一人入るお陰で速く済みそうだけどな。

俺はソルジャーの特徴的武装である『GUNBLADE』を取出しそれをGNバスターードに集結させる。

「これで仕舞だ！」

『ファンケスラスト』！

俺はノーブラントに魔力を流しそれをそのまま砕擊の形で飛ばす。

魔力を纏わせたファンケを操り魔の「の様にしそのまま「を閉じさせる。

即座にネーナが『バインド』でジユエルシードを固定しヨハンが近くにいる転生者共を牽制している間に一人は封印態勢に入った。

「『ジユエルシード』。」十一 封印!」

なのはとゆいが思ひつたりに、ジョーハルシードが郵便わざその田の戦闘は終わりを告げた。

第一話（後書き）

如何でしたか？

次回はちょっと飛んでフ^イイト^{ンパルス・トライ}とシンがなのは達と邂逅します。

次回『激情と三つと転生者』

お楽しみに！

第一話（前書き）

激情と三つと転生者
インパルス・トライティ

第一話

ミハエルSIDE

「……此處は猫屋敷か？」

俺達は今、月村すずかの家（正確に言えば屋敷だな）に来ていた。きっかけはなのはの兄貴が恋人であるすずかの姉貴の家に遊びに行くからそのおまけとして着いてきた。

そして入つて俺が思つたのはすずかの屋敷にいる猫の数だ、庭に入るのを数えると一、三十匹は入るぞ。

「ま、くつろげるなら何でも良いけどな。」

ジユエルシードの暴走体を封印した後なのはとゆいはフェレット改め『ユーノ・スクライア』から魔法を知らされ更にジユエルシードの存在及び危険性を知らされた為にユーノのジユエルシード集めを手伝つてはいる。

んで、昨日神社でジユエルシードが発生したんだがそこにいたのは仲間の転生者に聞いた姿（子犬から変化したケルベロス）とは違い二足歩行のライオンだった。

お陰でなのは達と子犬の飼い主の両方守るのに苦労したが最低系転生者である『神崎終夜』がフロスト兄弟（正確には二人が助つ人として駆け付けようとしているのを見てつけていたらしい）と共に助つ人として駆け付けてくれたお陰で何とかなつたぜ。

「（み、ミハエル～～～助けてくれ～～～！）」

念話に振り向くとユーノが数匹の猫に追い掛け回されていた。

「（氣合いで頑張れ！）」

「（そ、そんな殺生な～～～！）」

俺があつさり見捨てるに泣きに入るゴーノ。
ま、食べられるわけじゃないから大丈夫だろ。

「（ミハエルー。）」

ゴーノの姿にニヤニヤしていたコハンが焦つた様子で念話を送つ
てきた。

「（どうした？）」

「（此処にジュエルシードが一個あるらしい、手分けして捜すぞー。）

「んなー？マジかよー？

「（解つたなのはにも伝えとくぜ！

なのは、ジュエルシードだ！この邸内に有りやがるー手分けして捜
すぞー！）」

「（ええー？解つたすぐに行くのー。）」

「（シャギア、オルバ、聞こえつか！

ジュエルシードが出たぞー。）」

ついでにフロスト兄弟にも連絡しておく人手は多い方が良いぜ。

「（やつきコハンから聞いた。）」

「（コハンとネーナ、僕と兄さん、ミハエルとなのは、ゴーノとゆ
いが組になって捜せだつて。）」

シャギアとオルバの返事を聞き俺はすぐに行動を開始した。

……

「ジュエルシードは何処だらうな？」

因みにユーノがさつき結界を張り巡らしたから暴れてもOKだ。

「…………あれじゃないかな?」

なのはが指差した方向を見るとそこには周りにある木ぐらい大きい猫がいた。

「おいおい……一体どんな願望を叶えたんだ?」

「あんなのに寄つてこられたらすずかちゃんが潰れちゃうよ……」
なのは、お前やつぱり天然だろ。

「ま、大人しくしている内に片付けるか。

ツヴァイ、セットアップ。」

「そうだね。

レイジングハート、セットアップ!」

俺がスローネッヴァイに似せた鎧を装着し（因みに俺は『ミッヂナルダ式』の魔法が得意だ）なのはが白い制服状のバリアジャケットを装備する。

『フライヤーフイン』

なのはの靴に翼が装備され空を飛べる様になる。
さて行くとします……！？

「危ねえ！！」

「ふえ！？／／／」

俺がなのはを抱えて芝生を転がるとさつきまで俺達がいた場所に緑色の魔力弾が当たるのが同時だつた。

「ち、誰だ！」

俺が上を見ると……青と白の鎧を装着した紅い目に黒髪のガキと黒いバリアジャケットを装備している深紅の目に金髪の女が埠の上に

立っていた。

シンシード

「くー外した！」

俺は茶髪のツインテールの女の子を狙つて撃つたライフルの弾丸が
青い髪の男の子に躰されたのを見て舌打ちをした。

「しようがないよ、シン。

あの子の勘が良かつただけ。」

フェイトが慰めてくれたけど一撃で仕留めた方が戦つよりずっとま
しだ。

「戦うしか無いよな……行くぞ、インパルス！」

『了解しました、マスター。』

「行くよバルティックシユ！」

『イエス、サー。』

俺達は壙から飛び降りるとフェイトはジュエルシードが変化させた
猫と俺は一人と対峙した。

「君は誰？あの子は誰？

何でジュエルシードを集めようとするの！？」

茶髪のツインテールの女の子が俺に話し掛けるけど俺は無視してビ
ームサーべルを引き抜きそのまま斬り掛かる。

「やらせるか！」

しかし青い髪の男の持つている大剣で防がれ弾き飛ばされる。

「力は向こうが上か……なら！ インパルス！

ソリューションを!

了解！

俺はフォースシルエットからソードシルエットに換装するとそのままエクスカリバーを連結させまた斬り掛かる。

「何度も無駄だ！」

甘いのはあんただ！

卷之三

俺は即座に連絡をせたエクスカリバーに炎を纏わせそのままふり切る。

「おわあ！？」

魔力も編み込んだ斬激に男は吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ミハエル君！？許さないの！『ディバインバスター』！」

茶髪のツインテールの女の子が俺に桃色の魔力砲撃を撃つてきただけ
ど俺はすぐさま防御魔法の（これしか使えないけどな）『ラウンド
シールド』を展開して防ぐ。

「砲撃には砲撃だ！」

シナリオ

了
解
！

奄美ノノハナ

俺はインパルスのバツクパツクを接近戦用のソードシルエットから砲撃戦用の『ブラストシルエット』に換装させるとそのままプラストシルエットの最大武装の『ケルベロス』を放つ。

ケルベロスは女の子の砲撃を消し飛ばしてそのまま屏まで吹き飛ば

した。

「（フェイト、終わったか？）」

俺は念話で「エイトか封印を終えたか聞いてみる」

「（終わつたには終わつたけど戦闘になつてゐるー。）」

俺はフローティーとの念話を終えるとそのまま駆け出した。

オリ主（笑） SIDE

俺はたった今ジユエルシードの回収を終えたと思われるフロイトと交戦していた。

「……ふん……最強オリ主の俺を差し置くからこいつなるんだよ。」
「……」
「……」

「（最も、今はフロイトにフラグを建設しなきやな！）

俺は自分の『デバイス』である『セイグリッドハート』に砲撃魔法を放たせる。

「ぐー！？」

『ラウンドシールド』

『SUSU』ランクだから……

あいつのワンドシールドを破つてファイトを吹き飛ばした。

これでフュイトは氣絶し俺は接近してフュイトにバインドをかける。
くくく……後はフュイトを利用してフレシアに接触してハーレムの一員に……

「フユイト!?

卷之三

『シンドバッド』はそこへ此のモードで、次は踊り舟はされた

ぐ……！モブキヤラ風情が！何をしやがる！」

「！？」前

アリヤトはお前みたいな奴には渡らない！

ミヅニマラガビノム

「ば～～～か！」『AIC』！

俺はモードのテロイズムに録してあるE/Sの能力を便にと

「真っ正直に突っ込むかつての！」

一 け ひ え ！ ？

モブキヤラは何と突進の途中で飛び跳ね俺の後ろに回ると蹴りを入れてきた。

俺は吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

「くそがあー！」約束されし勝利の剣エクスカリバー！』

俺はレアスキルを使って金髪の騎士王が使っていた剣を振るうけど

「力に振り回されている奴に俺は……負けない！」

「ぐはあ！？」

あつさり避けられビームサーべルでバリアジャケットを切り裂かれ

た。

「これで……終わりだあ！』三つの魔獸よ、今こそ汝が食らうべき敵を見つけ食らい尽くせ』！

『ケルベロスバスター』！！

俺はモブキャラから放たれた砲撃をもろに受けそのまま気絶した。

第一話（後書き）

如何でしたか？

次回は温泉での戦闘です。

次回『白と激情、黒と剣士』《インパルス&ホワイトマジシャン、ブラック&ソードマン》『

お楽しみに！

第三話（前書き）

白と激情、黒と剣士

『ホワイトマジシャン&インパルス、ブリックマジシャン&ソードマン』

シン SIDE

あの自称最強オーナーを伸した後俺はフェイトをお姫様抱っこで空を飛んで隠れ家まで連れてきた。

あ、ちゃんと認識障害の魔法を使ったから一般人には見えないからな？

「ただいま～～～。」

「シン、フェイト、お帰り……シン～フェイトは一体どうしたんだい！？」

帰るなりアルフが気絶したままのフェイトを見て血相を変えて俺に詰め寄る。

「ああ、俺を襲ってきた奴等の一昧に攻撃されて気絶したんだ。」

「く……あたしがいたら何とかなったのに……！」

アルフが口惜しそうに気絶（）といっか寝ている（）しているフェイトの顔を撫でる。

「ああ、その為にはさつと終わらせないとな。

……今夜もジュエルシードを捜しに行くからフェイトは起きこすなよ

？

「……解つてゐる。

シン……一応言つておく。あんたは良い奴だよ。

いきなり現れたフェイトやあたしに何の欲望も無しにジュエルシードを渡してくれてしかもジュエルシードを集めの手伝ってくれているんだからね。

アルフがすまなそうに俺を見ながら礼を言つ。

「当たり前じゃん、女の子にあんな奴等の相手をさせる訳にはいかないしそれに……地球の危機って聞かされて黙つてる訳にはいかないよ。」

下手をすれば地球消滅なんてヤバイ事になるような物はさつと集めないと怖いからな。

「じゃあ、行つて来る。」

「ああ、行つてらっしゃいだ。」

俺はアルフにフェイントを預けて再び夜空に舞い戻り捜索を開始した。

ミハエル SIDE

「…………はあ。」

俺は今溜め息を吐いているのは見てすまない気持ちになつた。

あの後ヨハンに振り起こされて目を覚ました俺達だがどうやら神崎終夜も返り討ちにあつたらしく朝からむすつとなつていた。

「（ミハエル、お前はガンダムタイプの敵と戦つたんだな？）」「ヨハンが念話で俺に話し掛けてくる。

「（ああ、武装を換装してたしメカニカルな鎧も装備してた十中八九俺達の様にガンダムがある世界からきた筈だ。）」「シヤギアやオルバの様にな。

「トリニティ三兄妹にフロスト兄弟、それから……粕。なのは姉さんと私がアリサやすずかに『温泉に行かない？』って誘われたから来ない？」

と、ゆいが俺達を誘つてくる。
温泉か……悪くないな。

「解つた、行くぜ。」

「大した予定も無いし行くわ。」

「予定も無いから行けるぞ。」

「たまにはジユエルシード捜しも忘れて休むとするか。」

「そうだね、兄さん。」

「おい、粕つて俺の事なのか？」

約一名苦々しい顔をしていたけど温泉が楽しみで仕方ないぜ。

「ミハエル君、温泉一緒に入ろう!」

温泉旅館に来て少し休んだ後、なのはにいきなり言われた。

「……待て、待て待て待て待て！」

何で混浴なんだ！？大体俺達は男湯で……

「ミハエル……」

ヨハンが壁紙を指差すとそこには『十一歳まで混浴可能』と書かれていた。

「な、何じゃそりや／＼／＼！？」

「と、言つ訳で行こつー！」

なのはに首根っこを掴まれるが俺は道連れにヨハンの首根っこを掴みヨハンも苦し紛れにフロスト兄弟の首根っこを掴む。

俺達四人はそのまま女湯に連れ込まれた。

「たく……何が悲しくて狂暴女と一緒に温泉に入らなきゃいけな

いんだ?
」

「ミハエル、それどういう意味かしら？」

俺が冷や汗をかきながら振り向くとそこには怒りの四つ角を浮かべ
二『アリナ・バニノグマ・ジー』

「あ……こせんのや……」

「一回死ね！」

見事に俺はアリサのソーツギッシュを食べこころぶ。飛はされた。

ミハユル君

戸は振り向くとなのはか茹でた虫の様に顔を真
赤にしたいた

「何だ？」

「たゞ
わかつたよ。

俺は手にあつたタオル（何時の間に持つたんだ?）でなのはの背中を拭く。

「ありがとう……／＼／＼」
「どういたしましてだ。」

「あの野郎俺のなのはこ……べー?」「空気を読め。」「

…………まあ、雑音も聞こえるけどな。

夜……

「ミハエル……」

「ああ……」

ミハンが起きてここのを見て俺は確信した。

「…………」「ジユエルシードだ。」「…………」

俺達四人+はデバイスを展開してネーナ、なのはにゅいと合流するジユエルシードの発動地点田指して突き進み始めた。

シンドイ

「フヒイト、今回のジユエルシードは楽で良かつたな。」

「うん。」

俺達は今、ジユエルシードの発動地点だった川原にいた。今回のジユエルシードは発動して間が無かつたのかそれとも元からそうだったのかわからぬけど異常に弱かつたから速攻で封印できた。

だけど……

「また会ったな！」

来たよ邪魔者が。

俺は嫌々ながら振り向くとそこにはこの前伸した自称最強オリ主が剣と銃が合体したようなデバイスを俺に向けていた。

「此処で合つたが百年目だ！」

覚悟しやがれ……「何処の時代劇だバカ者。」ぎやふん！？最もすぐに茶髪をポーテールにした女の子に首を捻られて氣絶したけど。

「また……合つたね。」

話し掛けてきたのは前に倒した茶髪をツインテールにした女の子だった。

「まあな……」

俺はパームサーべルを構えて何時でも攻撃できるよ！

「（シン、昨日戦つた子なの？）

「（ああ。）」

フュイトから来た念話に答えるけど構えは崩さない。

「ねえ……お名前……聞かせて？」

名前……

「シン……シン・アスカだ。」

「（シン！？）」

あつさり名前を答えた俺にフュイトが驚く。

「だけど……知つたところで今から倒されるあなたには関係ない！」

俺はソードシルホットを開いてそのまま一刀流で斬り掛かる。

慌てて茶髪のポーテールの女の子が血の様に紅い刀で弾き飛ばす。

「貴様……一何をするー。」

「姉さん！。」

「悪いな俺は……いや、俺達は田的の為には容赦なんてしない！」
俺はエクスカリバーを連結させてそのまま振るう。

「ぐ……！行くぞ『雪風』！」

『強化開始』《トレース・オン》！

『承知した。』

そのまま女の子を押し切ろうとした俺は、デバイスから魔力を供給されて身体能力が向上した（と見られる）女の子に投げ飛ばされた。

「うわ！？」

「隙あり！」

「シンを倒させはしない！！

バルディッシュ！』

『フォトンランサー』

「ち！」

すぐに女の子が斬り掛かつてきただけどフェイトから放たれた雷の槍に追撃は防がれた。

「（フェイト、ポニー・テールの女の子は任せた！）」

「（オッケー、ツインテールの女の子は任せたよ！）」

「『なのは』！『ゆい』！

助太刀するぜ……「させるかああああああああああああああああな！？」

青い髪の男の子とその仲間達がやつてきただけどアルフが足止めをする。

俺達はそのまま戦闘に突入した。

「行くよー。」

私は金色に光る刃を持つた鎌を振るう金髪のツインテールの少女の攻撃を冷静に見ていた。

多分この子は高速戦闘を得意とするタイプの筈……だつたらー。

「距離を詰めるまで！」

雪風、『トース・オン投影開始』！

『承知！』

次の瞬間雪風の刀が陰陽剣『莫耶・干将』へと変貌する。

「なー!? だけど形が変わるくらいならー。」

金髪の女の子がそのまま鎌を振るつてくるが私はそれを無視しそのまま斬り掛かる。

「ぐ……！」

「畳み掛けさせて貰うぞー！『紫電演舞』！」

言葉と共に莫耶、干将に炎が灯りそのまま舞つ様に斬り掛かる。

「ぐ……バルディッシュユー！」

『ラウンドシールド』

私の前にシールドが展開され殆どの斬撃が防がれてしまつ。が……

「それが狙いだ！投影！」

私の手の莫耶、干将が消え盾とライフルと剣が一体化した武器『G NSO-0』が形成されシールドを袈裟懸けに切り裂く。

「な……」

「投影……食らへんぞくせ『ヒア』よー。」

私は最古の英雄王が使っていた剣を振るい切り伏せる前に後ろからの砲撃を回避した。

桃色……なのは姉さん、暴れ過ぎだ。

私は苦笑いをしながら田の前の女の子に再び斬り掛かつた。

なのはSHIDE

「シン君、何で君もあの女の子もジュエルシーードを集めようとするの!?」

「あれば危険な物なのに！」

敵であるあなたには関係ない話だし話す氣も無二一・一・

シン君は私に二つの剣を連結させた大剣で斬り掛かってくるけど私は冷静に受け流す。

「だつたら……これに勝つたら教えて！」

『**テイバインバスター**』！

私は砲撃魔法を使つてシン君を攻撃する。

「またそれか……『前のまほじやな』よー。『アクセルシューター』

一タ一を撃つてシン君を吹き飛ばす。

「**ブラストシリエット**を！」

シン君の声と共に剣の代わりに大量の銃火器がシン君に装備される。

「負けないよ！『アクセルバスター』！！！」

シン君が巨大な砲撃魔法を撃つけど私はそれに『音速の砲撃で一点を突破する』を念頭に置いた砲撃魔法でシン君の砲撃を打ち消してシン君を吹き飛ばす。

「が
…
！」

「私の勝ちだね！」

私はシン君の前に立せ勝利を宣言する

「シン！」

金髪の女の子が悲鳴を上に

おのこにせし君は其の情を闇にシテ

「あんたつて馬鹿だね。」

ジュエルシークは回収したから逃げる一手も打てるんだよ！」

ノノ君

シン君は言うとすぐに跳ね上がって女の子や狼と合流してそのまま転移魔法で逃げていった。

「また……逃げられちゃった。

一 姉さん……大丈夫

第一回

ゆいが私の肩に手を置いて励ましてくれるけど私の心は何処か晴れなかつた。

第三話（後書き）

如何でしたか？

次回は転生者（神崎終夜とは違う使い捨てです） 視点で舞台はミシ
ドチルダです。

次回『愚かな末路』

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2537ba/>

魔法戦士リリカルガンダム

2012年1月13日21時54分発行